1	名古屋	伊勝小学校	サカキバラ　カホ 名前　榊原　歌穂

分科会番号	19	分科会名	読書・学校図書館

多くの分類の本に興味をもち、そのよさを共有できる児童の育成

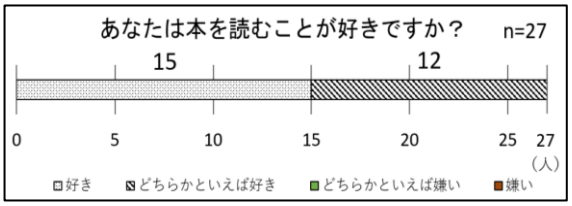
1　研究のねらい

私は、児童に様々なことを知ったり、体験したりしてほしいと思っている。なぜなら、様々なことを知ったり、体験したりする中で、その後の生活に生かせる新しい発見や気付きの機会が増えると考えるからである。しかし、最近はインターネットやＡＩの発達などにより、例えば YouTube で動画を見る時なども、自分の好きなものが常に「おすすめ」に上がり、それだけを見てしまう環境となっている。その結果、新しいことに視野が広がりにくく、自分の好きなことだけに取り組む傾向になりやすい。

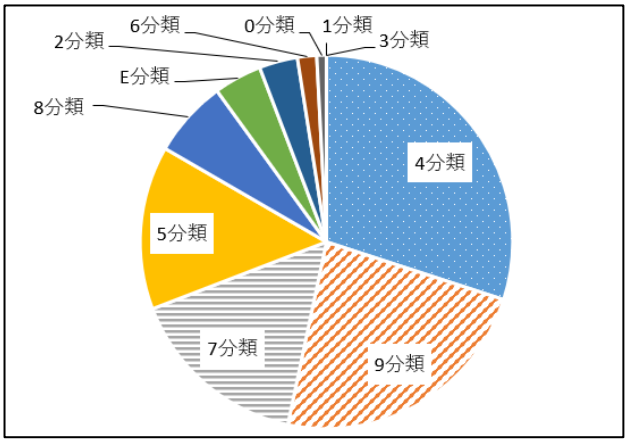
そこで、様々なことを知るきっかけとして、本を読むことがとても有効な手段であると私は考える。図書室はいつも開館しており、誰でも読むことができ、古い本から新しい本まで様々な本がそろっている。また、たまたま目に入った本を手に取ることで、新たな世界にふれるきっかけになることもある。だからこそ、多くの分類の本に興味をもち、進んで読み、そのよさを共有できるようになってほしいと考える。

2　児童の実態

本学級（４年生）は、本を読むことが好きな児童が 27 人中 15 人、どちらかといえば好きな児童が 12 人と、全員が本を読むことが好きである〈資料１〉。しかし、本学級の児童の図書室の貸出記録（４月～６月）を見ると、４分類（自然科学）が最も多く、その次に９分類（文学）、７分類（芸術、美術）が続き、全体の３分の２を占めている〈資料２〉。児童一人一人を見ると、借りた本の全てが９分類の児童や、18 冊中 11 冊が４分類の本を借りている児童などがいた。そのため、本学級の児童は、本を読むことが好きであるとはいえ、読む本の分類に偏りがある状態だといえる。



〈資料１〉本学級 27 人の児童への実践前アンケート結果



〈資料２〉図書室の貸出記録（４月～６月）

3　実践の方法

(1) 目指す児童像

・多くの分類の本に興味をもち、進んで読書する児童
・自分や友達の興味のある本やそのよさを共有し、読書の幅を広げられる児童

(2) 読書に親しむ時間の確保

本学級の児童は、本を読むことが好きな児童が多いが、休み時間は運動場で遊んだり、授業後は習い事に通ったりして、本を読む時間をあまり取ることができていない。そのため、日常的に読書に親しむ時間を確保することが必要であると考えた。そこで、火曜日と水曜日には児童が自由に本を読むことができる読書タイムを、月曜日と木曜日には児童があまり読まない分類の本を中心に、教師による本の紹介の時間を設けた。児童が日常的に本に触れることで、多くの分類の本に興味をもつことができるようにした。

(3) 自分の読書傾向を知り、読書計画を立てる活動

児童の図書室の貸出記録を見ると、学級全体でも児童一人一人を見ても、読んでいる本の分類に偏りがあることが分かった。そのため、児童に読書記録を付けさせ、自分の読書傾向に気付かせる活動を行うことにした。その後、児童があまり読んでいない分類の本に興味をもたせるために、教師が紹介した本や友達が読んでいて自分も読みたいと思った本などを記録させ、読書計画を立てさせることにした。

(4) 友達と本のよさを共有する活動

教師がおすすめの本を紹介した時に、多くの児童が興味をもって聞いていたが、実際に本を手に取った児童は少なかった。教師の「読ませたい」という思いだけが強く、児童は「面白そう」とは感じるが、「もっと読みたい」という気持ちには至らなかったためであると考えられる。そのため、児童同士でおすすめの本を紹介し合う活動を行うことにした。同世代の友達のおすすめの本という、より児童が興味をもち、読みたいと思える本に触れるとともに、友達に紹介するという活動の中で、自分の好きな本をより深く理解したり、さらに読書の幅を広げたりすることができると考えた。

4　実践の内容

(1) 読書に親しむ時間の確保（日常実践）

①　実践のねらい

読書タイムで読書時間を確保し、教師が本を紹介することで、多くの分類の本に興味をもつことができるようにする。

②　手立て

毎週火曜日、水曜日に読書タイムを設定し、児童の読書時間を確保する。また、毎週月曜日、木曜日には教師による様々な分類の本の紹介を行う。

③　活動の様子

児童は、読書タイムがある日を楽しみにしている様子が見られた。読書タイムにな

ると、すぐに図書室へ向かい、読みたい本を探したり、読んだりしている姿が多く見られた。また、読書タイムや休み時間に教室で家から持参した本や図書室で借りた本を読んでいる児童もいた。決まった曜日に読書時間を確保することによって、児童は「続きは明日読もう。」「次は何を読もうかな。」などと見通しをもって、本を読むことができた。また、教師が本を紹介すると、児童は内容について積極的に質問したり、すぐに図書室でその本を借りたりしていた。「読みたい本が見付からない。」と、困っている児童には、どのようなことに興味があるのか聞いたり、教師のおすすめの本を紹介したりした。

④　成果と課題

定期的に読書タイムを確保することで、短時間で集中しつつ、楽しみながら本を読む姿が多く見られた。また、教師が本を紹介すると興味をもち、すぐに図書館に借りにいったり「次に貸してね。」と話したりする姿が見られた。ただ、元々本を読むことは好きで、本には親しんでいたが、読んでいる本に偏りがある児童が多かった。また、教師が紹介した本を手に取る児童は一定数いたものの、いつも読んでいる分類の本を手に取る児童の姿も見られた。

(2) 自分の読書傾向を知り、読書計画を立てる活動（授業実践）

①　実践のねらい

本の分類があることを知り、マイ本棚の読書記録を分類分けすることで、自分の読書傾向に気付くことができるようにする。また、それぞれの児童が読んでいる本を共有できるようにしたり、教師が新しい本を紹介したりすることで、自分が読んだことのない分類や友達が読んでいる本の分類に興味をもち、進んで本を読むことができるようにする。

〈資料３〉マイ本棚のカード

②　手立て

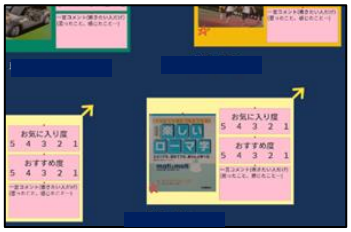
クラウド型授業支援アプリ（以下ロイロノート）を活用し、マイ本棚として読んだ本について記録させる。カードには、本の表紙の写真、お気に入り度、おすすめ度、一言コメントを記録させ、カードを蓄積させていく〈資料３〉。また、学習後、分類ごとにカードの色を変えるようにする〈資料４〉。さらに、ロイロノートを活用し、未来本棚として、これから読みたい本を記録させる〈資料５〉。

0・1類－黒　2類－紺　3類－青　4類－水 5類－緑　6類－黄緑　7類－橙　8類－黄 9類－赤　E類－桃

〈資料４〉児童に示した分類別のカードの色

③　活動の様子

読書傾向を知るために記録させたマイ本棚のカードを見ると、一言コメントの枠がびっしり埋まるほど感想やあらすじを書いたり、本のポップのように色なども工夫しながらおす


〈資料５〉未来本棚の一部

すめポイントを書いたりする児童もいた〈資料６〉。

ある程度読書記録が貯まったころに、自分の読書傾向を知る活動をした。図書室の本を想起させ、背表紙にあるラベルや表示されている分類記号の数字の意味について知らせた。その後、児童に分類別の色を示した。児童は、今までロイロノートに蓄積してきた読書記録のカードの色を分類ごとに指定された色に変えた。すると「自分は絵本をよく読むことが分かった。」〈資料７〉など、自分の読書傾向の偏りに気付いた児童が多かった。振り返りでは「絵本ばかりではなく、自然科学や社会科学の本を読んでみたいと思った。」という感想をもち、分類記号を生かして、他の分野に目を向け、読書傾向を広げようとする児童の姿が見られた。

(思ったこと、感じたこと…)
「KZ」という探偵チームである事件を解決する話で私が一番気に入っている話です。今回も、主人公の「彩」という中学生が同じ学年の男の子たちと、事件を解決していきます!

〈資料６〉児童が書いた
一言コメントの一部

〈資料７〉ある児童の６月の
マイ本棚のカード

その後、ロイロノートの共有機能で児童が互いに読んでいる本が分かるようにした。すると、友達の読んでいる本の写真や感想を見て、図書室で本を探す児童や、友達に本の場所を聞く児童などがいた。さらに、児童がなかなか読み進められない分類の本を鶴舞中央図書館の団体貸出で 56 冊借りて、教師からのおすすめ本として児童に紹介した。その後、班ごとに付箋紙でラベルを隠した８冊の本を配付し、分類を予想する活動を行った。児童は、分類表を見たり、本をめくってみたりしながら、友達とどの分類になるかを考えていた。分類の答え合わせをした後、児童が特に読み進められない０類と１類の２冊の本について教師が読み聞かせをした。子どもたちは普段あまり読まない分類の本に興味を示した様子だった。その後、読みたい本が見付かっても、「今読んでいる本がある」「他の人が借りている」などの場合を想起させ、これから読みたい本をためておける「未来本棚」（ロイロノートの記録を残すページ）をつくることを伝えた。その後、提出箱の中からそれぞれ読みたい本のカードを移動させて活用するように伝えた。すると、多くの児童は、提出箱から読みたい本を選んでいた。その後の読書タイムでは、「未来本棚」に入れた鶴舞中央図書館の本を実際に読んでいる児童がいた。「未来本棚」をつくることで、多くの分類の本を読む様子が見られた。

④　成果と課題

カードの色を分けて、読んだ本の分類を可視化することで、児童が自分の読書傾向に気付くことができたり、その後の読書タイムでは、「この本は何類だろう。」と教師に聞くなど、分類を意識して本を探したりする児童が増えた。

また、読書計画を立てる活動では、いつも９分類を読んでいた児童が、違う分類の本に興味をもち、実際に手に取って読んだり「つまらなさそう、難しそうと思っていた本でも、意外と面白そうな本がたくさんあることに気付いた。」という感想をもったりしていた。

一方で、あまり読書記録がたまっていなかった児童は、自分の読書傾向について十分に知ることができなかった。また「０類、１類で読みたいのは、１、２冊くらいだった。」「０類、１類も面白そうだけど、Ｅ（絵本）の方が読みたい。」など、いつも読んでいない分類になかなか手を伸ばすことができない児童がいた。教師の「多くの分類の本を読んでほしい」という思いだけが強くなってしまったため、児童が自然に読みたいと思える本を探したり、紹介方法を工夫したりしていくとよかった。

(3) 友達と本のよさを共有する活動（授業実践）

① 実践のねらい

国語科の「『読書発表会』をしよう」で、児童同士がおすすめの本を紹介し合う活動を通して、自分の好きな本についてより深く理解をしたり、さらに読書の幅を広げたりすることができるようにする。

② 手立て

ブックトークという方法で、児童が本を紹介し合う活動を行う。児童は、組み立てメモや原稿を作り、５～６人の班に分かれて、互いに２～３冊の本を紹介し合う。

③ 活動の様子

最初に、学校司書の先生にブックトークをしてもらい、ブックトークの仕方やそのよさを体感した。児童は、学校司書の問い掛けに対して「その本、知ってる。」「読んだことない。」などと答えながら、ブックトークを楽しんでいた。途中で、興味をもった本について、文字の大きさや内容を質問したり「読んでみたい。」という声が自然とあがったりしていた。

その後、児童同士でブックトークをする準備を始めた。まず児童は、今まで読んだことがある本やおすすめの本を基に、テーマに沿って２～３冊の本を選んだ。そして、はじめ（そのテーマにした理由）中（本の紹介）終わり（みんなに伝えたいこと）の流れで、組み立てメモを作成した。中（本の紹介）では、①あらすじ②心に残ったところ③絵や写真を見せるところ④読み聞かせをするところ⑤自分との関わりの中から、より友達に興味をもってもらえる紹介方法を選択し、文章を書いた。児童は、それぞれ自分の好きな本に興味をもってもらおうと途中まであらすじを書いて興味を引いたり、問い掛けを考えたりしながら、組み立てメモを作っていた。

組み立てメモが完成した後、発表会本番の前に「ミニ発表会」を行った。ミニ発表会は、３人１組の班で行った。発表者は、組み立てメモを基に本の紹介を行い、聞いていた児童は、内容の観点が書かれたチェックシートを活用しながら、よい点や改善点を発表者の児童に伝えていた。どの児童も、自分の紹介したいテーマや本について生き生きとした表情で友達に紹介する様子が見られた。「絵や写真を見せるとよい。」とアドバイスをもらった児童の本を班のみんなで見ながら、どこを見せると聞いている人が興味をもてるか話し合っている姿がいくつか見られた〈資料８〉。改善点だけではなく、よい点も

伝え合うことによって、自分の発表に自信をもつことができた児童もいると考えられる。そして、組み立てメモとミニ発表会でもらったアドバイスを基に原稿を書いた。

読書発表会本番は、５人又は６人１組の班ごとで行った。児童は、聞いている友達が興味をもってくれるように、絵や写真を見せたり、抑揚や話す速さに気を付けたりしながら、今まで一生懸命つくった原稿を読んでいた〈資料９〉。発表後は、聞いていた同じ班の友達が質問や感想を発表者に直接伝えたり、ワークシートに書いたりした。質問や感想の時間に、発表者の本の周りに集まり、楽しそうに本の分類について議論をしたり、より深い内容について質問したりする児童の様子も見られた〈資料 10〉。

〈資料８〉本を見ながら話し合う様子

〈資料９〉班に向けて本を紹介する児童の様子

〈資料 10〉質問や感想を伝え合う児童の様子

④　成果と課題

本を紹介するために、本を何度も読み返したり、印象に残っている場面を探したりして、本に親しみ、理解を深めることができた。また、友達の紹介に対して、ミニ発表会では主体的にアドバイスをしたり、発表会本番では積極的に感想や質問を伝えたりする様子が見られた。

一方で、友達のおすすめの本を聞いた後、すぐに声を掛けて借りたりする様子は数人しか見られなかったので、引き続き、読んだ後に感想を伝えるなど、よさを共有するための手立てを考えていきたい。

５　まとめ

実践を通して、多くの分類に興味をもつことができた児童が増えたと感じられる。読書発表会では、「何類の本ですか。」という質問に、「９類だと思う。」「でも、生き物の内容だから、４類かな。」のような会話が自然と出ていた。これは、日常的に多くの分類の本を紹介し、読書タイムで本に親しんでいたからこそだといえる。

また、読書発表会では、一人一人が生き生きと本を紹介し、聞いている児童からも多くの質問や感想が出た。その様子から「本を知ってほしい。」「もっと知りたい、読みたい。」という思いを児童同士が共有できていると感じた。これからも日常的に、読書タイムを設けるとともに、教師の代わりに児童が朝の本の紹介を行うなど、より児童同士が本を通して交流できる場をつくる実践を続けていきたい。